

## 死と生前の非存在は何が違うのか

——対称性問題に対するマクマハンの応答を批判的に検討する——

石原諒太(京都大学)

本発表の目的は、剥奪説が直面する対称性問題に対するマクマハンの応答を批判的に検討することである。

死の哲学における中心的な問いの一つは、なぜ死は死ぬ当人にとって悪いのか、という問いである。「剥奪説」と呼ばれる立場は、この問いに対する一つの応答である。この立場によると、死が死ぬ当人にとって悪いのは、死が死ぬ当人から、死ななければ享受していたであろう様々な善を剥奪するからである。この立場は T.ネーゲル(1970)によって提示されて以来、多くの論者によって支持されてきた(e.g. Feldman 1991; Bradley 2009)。

しかし剥奪説には一見したところ、「対称性問題」と呼ばれる問題があるように見える。これは一言で言えば、剥奪説が死の悪さに対して与える説明は、生前の非存在についても同様に当てはまってしまうのではないか、という問題である。

すでに述べたように剥奪説によると、死が死ぬ当人にとって悪いのは、死ななければ享受していたであろう様々な善が剥奪されるからである。しかし、もしこの説明が正しいとするなら、実際に生まれる前には存在しなかったという生前の非存在もまた、死と同様の理由で悪いということになるように見える。なぜなら、もし実際よりも早く生まれていたなら、実際に誕生するよりも前のあいだに、我々はより多くの善を享受していたであろうからである。

だが、死と生前の非存在に対する我々の態度のうちには、ある種の非対称性がある。すなわち我々は通常、自分が死ぬのを残念に思う一方で、生前の非存在は残念には思わない、あるいは少なくとも、自分が死ぬのを残念に思うのと同じようには、生前の非存在を残念には思わない。そしてこの非対称的な態度は、直観的には合理的に見える。

そしてもし、死と生前の非存在が同様の理由(善の剥奪)のために悪いのなら、我々の態度におけるこの非対称性が合理的だと主張するのは難しくなるだろう。なぜなら、もし二種類の非存在がどちらも我々にとって悪く、しかも同様の理由のために悪いのなら、二種類の非存在に対しては対称的な態度をとるのが合理的に見えるからである。したがって、剥奪説は偽であるように見える。以上が、剥奪説が直面する対称性問題である。

対称性問題に回答する一つの路線は、死と生前の非存在との間には何らかの重要な違いがあることを示すことである。この路線はこれまで多くの論者によって試みられてきたが、これらの中でも、J.マクマハンによる対称性問題への応答、すなわち、実際の人生に含まれる様々な個物への愛着に着目した応答は、一見したところきわめて説得的に見える。さらにこの応答は、対称性問題に対する代表的な応答の一つ、すなわち実際よりも早く生まれることの不可能性に訴える応答に対して、実際よりも早く生まれることの可能性を許容できるという利点を有している。というのも、実際よりも早く生まれることが可能であるということは、T.ティンマーマンの「ビッグバン論証」によって説得的に示されているからである(cf. Timmerman 2018)。そこで本発表では、対称性問題に対するマクマハンの応答を批判的に検討し、この応答は対称性問題を実際には解決できていないことを示したい。

本発表の構成は以下の通りである。まず私は、対称性問題と、この問題に対するマクマハンの応答を紹介する。マクマハンの応答に対しては、すでに H.イー(2021)による反論が提示されて

いる。そこで次に、彼の反論を紹介し、マクマハンの主張の明確化を通じて、彼の反論はマクマハンに対して好意的な反論にはなっていないことを示したい。最後に私は、マクマハンの応答に対して以下の二つの反論を提示することによって、彼の応答は対称性問題を実際には解決できていないことを示したい。

マクマハンの応答によると、私たちが実際よりも早く存在し始めた人生には、実際の人生で私たちが大切に思っている個物が含まれていないため、実際よりも早く存在し始めた人生よりも実際の人生の方を好むのは合理的である。私が提示する二つの反論が示そうとするのは、この推論が妥当ではない、あるいは少なくとも、この推論の妥当性は明らかではないということである。

第一の反論は、私が実際よりも早く存在し始めた人生において私が大切に思っている個物に着目する。この人生には、私が実際の人生において大切に思っている個物が欠けているのと同じように、実際の人生には、私が実際よりも早く存在し始めた人生において私が大切に思っている個物が欠けているだろう。したがってマクマハンは、これら二つの欠如の間には何らかの重要な違いがあると断言しなければならないはずである。しかしこのような違いは少なくとも明らかではないため、マクマハンの応答に含まれる先の推論の妥当性は少なくとも明らかではない。

第二の反論は、B.ブラッドリーが提示する選好の合理性の必要十分条件に着目する(cf. Bradley 2015)。この条件によれば、任意の事態P、Qについて、PがQよりも自身の福利(well-being)の観点から見てより良い場合、またその場合に限り、QよりもPの方を好むのが合理的である。この条件を仮定すると、私が実際よりも早く存在し始めた人生には、実際の人生で私が大切に思っている個物が含まれていないという主張は、実際よりも早く存在し始めた人生よりも実際の人生の方を私が好むのは合理的であるという主張を含意しないということになる。したがって、マクマハンの応答に含まれる先の推論は妥当ではない。

## 参考文献

- Bradley, B. 2009. *Well-being and Death*. Oxford University Press.
- Bradley, B. 2015. How Should We Feel About Death? *Philosophical Papers* 44: 1-14.
- Feldman, F. 1991. Some Puzzles About the Evil of Death. *The Philosophical Review* 100: 205-227.
- Nagel, T. 1970. Death. *Noûs* 4: 73-80. Reprinted in his *Mortal Questions*, 1-10, Cambridge University Press, 1979, and in *The Metaphysics of Death*, ed. J. M. Fischer, 59-70, Stanford University Press, 1993.
- McMahan, J. 2006. The Lucretian Argument. In *The Good, the Right, Life and Death*, eds. K. McDaniel, J. R. Raibley, R. Feldman, & M. J. Zimmerman, 213-226, Routledge.
- Timmerman, T. 2018. Avoiding the Asymmetry Problem. *Ratio* 31: 88-102.
- Yi, H. 2021. Lucretian Symmetry and the Content-Based Approach. *Philosophia* 50: 815-831.